

健全性への希求と包摂的社会  
——人工社会シミュレーションによる検討——

日本学術振興会 石島健太郎

### 1. 問題の所在

本報告の目的は、障害者が内面化している能力主義の擁護と、障害者に包摂的な社会の設計がいかんして両立しうるのかを考察することにある。青い芝の会を牽引した横塚晃一（[1975]2007）に代表されるように、日本の障害者運動は、健全な能力をもつことを是とする社会が障害者を抑圧することを批判してきた。類似の批判は近年英米の障害学理論でも健全主義 ableism を批判する議論として出現している（Goodley 2014）。一方で、技術の利用や医療的介入により視覚や聴覚などが回復する場合、それを望む障害者は存在しうるし、そうした個人々の選好を全面的に批判することは難しい。しかし、障害者がみなそうした選択をすることを前提に社会を設計すれば、そうした選択をしない・できない障害者は排除されるし、将来の障害者が選択可能な手段が制限されてしまうだろう。こうした社会的ジレンマはいかに解消できるだろうか。

### 2. 方法

個人の選好とその集積の結果立ち現れる社会の様子を観察する方法のひとつとして、人工社会シミュレーションが挙げられる（中井 2010）。有限の資源のもとで財とスティグマの配分をおこなう社会を設定し、そのなかで能力を得るか否か、包摂的な社会を求めて運動するか否かといった選択肢について、個々に戦略をもった障害者を配置する。戦略ごとの利得に応じて淘汰が発生しながら数世代を経た後に、どのような社会が現れるのかを観察する。なお、シミュレーションには artisoc3.0 を用いた。

### 3. 結果

初期状態の戦略の比率や、技術導入にともなうコストに応じて結果の細部は異なるものの、運動への積極的な参加や、他の障害者への運動参加への働きかけのほか、社会が障害者の不利益を補償することに積極的であることによって、能力を求める選択をする場合としない場合のどちらであっても障害者の効用が相対的に高い水準で近似した。

### 4. 結論

シミュレーション上の細かな数値の設定を変えた場合にも同様の結果が安定して得られるのか否かについては一定の留保が必要だが、社会の側に障害者に配慮した仕組みを実装することの効果がかめられたことは、障害者差別解消法を始めとした制度が十全に機能した場合の有効性を示唆するものである。とくに、各戦略の初期比率や運動の規模など、実際には介入し変化させることが容易ではない変数が多いことを踏まえれば、その意義はより強調することができる。なお、当日の報告ではモデルの詳細を紹介しつつ、実際にシミュレーションを動かしながらその様子を見ていく。

### 文献

Goodley, D., 2014, *Dis/ability Studies: Theorising Disablism and Ableism*, London: Routledge.

中井豊, 2010, 「社会学におけるエージェント・ベース・シミュレーション」『理論と方法』25(2): 275–85.

横塚晃一, [1975]2007, 『母よ! 殺すな』生活書院.